東北帝国大学における女子学生・女性研究者

永　田　英　明

はじめに

本稿は、戦前・戦中期を中心とする東北帝国大学の女子学生・女性研究者の状況について、基礎的なデータを提供することを目的としている。

東北帝国大学が1913（大正２）年わが国の大学としていち早く正規学生として女性の入学を認め、また戦前期を通じ最も多くの女性を受け入れていた官立大学であることはよく知られ、教育史研究の立場からすでに検討が行われている[(1)]。しかしその多くは、女性に対する大学教育開放の先駆例として1913年の３人の女子学生の入学に焦点を当てたもので、戦前期を通じた女子学生のあり方の解明という観点からは、まだ十分な調査・分析が進んでいるとは言いがたいようにも思われる。戦前期を通じた東北大学における女子学生の状況の分析は、戦前における女性の大学教育を実態面から知る上で重要な素材となると思われ、そうした観点からの資料・データの提供が重要な意味を持つと考えられる。これらについては、『文部省年報』等従来公表されている資料からもある程度の情報を得ることが可能だが、より正確かつ多角的な分析のためには、一次的な資料・個別的な事例にさかのぼっての調査・整理が必要である。本稿では東北大学史料館に所蔵されている各種の名簿資料、とりわけ学生課の作成した『学生原簿』に依拠した形で精査をおこない、女子学生に関するより多角的な情報を整理提供することを第一の課題とする。

また「帝国大学」である東北帝国大学の場合、女子学生あり方の問題は女性研究者育成の問題とも関わる部分が少なくない。教育史という観点からのみならず、学術史・科学史的な観点からの考察もまた必要あり、この観点からも東北帝国大学における動向を整理提供する意義があると考える。そこで本稿ではもう一つ、大学院生や若手教官としての女性の在職状況についても状況を整理・提供することを第二の課題とする。

なお東北大学史料館では、かつて2001（平成13）年３月から４月にかけて企画展「東北帝国大学と女子学生」を開催し、また直近でも2013（平成25）年９月から12月にかけ企画展「女子学生の誕生－100年前の挑戦」を開催した。本稿の内容は、この２つの展示会開催に際しおこなった各種の調査をベースに、さらに若干の追加調査をおこなった成果である[(2)]。

一、東北帝国大学における女子学生

１．本科生・聴講生

(1) 入学状況

1913年８月13日、東北帝国大学は黒田チカ・丹下ウメ・牧田らくの３名の女性を含む入学許可者に入学許可通知及び入学宣誓式の案内状を発送[(3)]、日本初の女性大学生３名がここに誕生することとなった。新聞報道や回顧談などの資料に記された関係者の証言によれば、すでに前年のうちには女性の受入が検討され、候補者（応募者）確保のための動きが始まっていた模様である[(4)]。３名の東北帝大進学は前例のない試みであったが、一般論としての女性に対する大学教育の必要性を否定しながらも一部の女性が大学に進み「学者として世に立つ」ことは避け

表１　東北帝国大学・旧制東北大学の年度別本科女子入学者数・卒業状況

本科入学年	理		農		法		経		文		合計		備考
	人数	卒業	人数	卒業	人数	卒業	人数	卒業	人数	卒業	人数	卒業	
1913	3	3									3	3	
1914～1922　入学者なし													
1923	3	3							2	2	5	5	法文学部開講
1924	3	3							1	1	4	4	
1925	3	3							5	4	8	7	
1926									2	2	2	2	
1927									2	1	2	1	
1928									3	3	3	3	再入学１名(文)
1929	1	1			1	1			5	5	7	7	
1930									3	3	3	3	
1931	1	0							2	2	3	2	
1932					1	1			5	5	6	6	
1933									3	3	※4	3	
1934					1	1			4	4	5	5	
1935					1	0			2	2	3	2	
1936	1	0							4	2	5	2	
1937	1	1							4	4	5	5	
1938									3	3	3	3	
1939	1	1							0	0	1	1	
1940									3	3	3	3	再入学１名(文)
1941							1	0	2	2	3	2	
1942									8	7	8	7	
1942-10	1	1					1	1	4	4	6	6	
1943-10									10	10	10	10	
1944-10	2	2							15	11	17	13	
1945	5	4							8	6	13	10	
1946									8	7	8	7	
1947	3	3	1	1					9	9	13	13	農学部開講
1948	4	3			1	1			7	5	12	9	
1949	3	3	1	1	1	1			6	6	11	11	
1950	2	2			2	2			7	7	11	11	再入学１名(法)
合計	37	33	2	2	8	7	2	1	137	123	187	165	

「法」「経」「文」は、1948年以前は法文学部各科（法科・経済科・文科）、1949年以降は法学部・経済学部・文学部としての数値。

※1933年度入学者には法文学部の学科不明者１名あり、合計の人数にのみ加算してある。

られない動きとする初代総長澤柳政太郎の女子高等教育観[5]と、新設大学としてより多くの志願学生を集める必要があるという東北帝国大学自身の事情[6]、さらには高等教育機関としての教育の質の向上のため、女性教員を帝大に送り込みそのキャリアアップを図りたいという、３名の女性が教員として在籍していた学校側の事情[7]、この三つの思惑が重なったある種の実験的な試みとして実現に至ったものと考えられる。

戦前期の女子学生の「実態」という面ではむしろ、女子学生の入学が継続的に見られるようになる1920年代以降の状況が重要であろう。表１および表２は、東北大学史料館が所蔵する旧学生部文書『学生原簿』のデータと『東北帝国大学一覧』の学生名簿をベースに、その他の各種の名簿資料を適宜照合するかたちで作成・整理した、年度ごとの女子学生の入学状況である。表１は本科生としての入学者、表２は聴講生ないし本科生としての入学者数をまとめたものである。本科生として入学した学生の中には、当初聴講生の身分で入学し、その後本科生に編入

表２　学部本科生・聴講生として入学した女子学生生徒の新規入学状況

入学年	理学部		農学部		法文学部（1949以降は法・経済・文学部）					
					法科		経済科		文科	
	本科生	聴講生	本科生	聴講生	本科生	聴講生	本科生	聴講生	本科生	聴講生
1913	3									
1914～21年　入学者なし										
1922		2								
1923	1	1							2	
1924	2	2							1	
1925	3								5	1
1926									1	
1927									2	1
1928									3	
1929	1				1				4	2
1930									1	1
1931	1								1	2
1932					1				4	
1933									3	
1934					1				4	1
1935		1			1				2	
1936									4	1
1937	1								2	
1938									3	
1939	1									1
1940									2	
1941							1		2	1
1942								1	7	1
1942-10	1								3	2
1943-10									9	1
1944-10	2								15	3
1945	5								5	
1946									7	
1947	3		1						9	1
1948	4	1			1				6	
1949	2		1		1				6	
1950	2				2				7	
合計	32	7	2	0	8	0	1	1	120	19

聴講生として入学した年度内に本科に編入したとみられる事例もあるが、表中では次年度の編入者として扱った。

された者も含まれている。そこで表２ではこの「聴講生」をも視野に入れ、本科生ないし聴講生のいずれかの身分で最初に入学した年次をもとに、入学者数の推移を整理し直した。聴講生から本科生に編入された者は、表１では本科編入の年次で、表２では聴講生として入学した年次でそれぞれ処理されている。なお1950（昭和25）年までの入学者数を対象にしているが、これはあくまで旧制大学への入学者数であり、1949、50年度には新制大学入学者数は含まれない。

まず表１をみると、東北帝国大学および旧制東北大学に本科生として入学した女性は、東北大学史料館の調査では総計187名を数えた。そのうち卒業して学士となった者は165名を数える。この中には卒業後再び学部や専攻を変えて入学・卒業した学生が３名おり、実人数では入学者184名、卒業者162名ということになる。

年度ごとの推移を眺めると、まず1913年に３人の女性が入学したあと、ちょうど10年間の空白期間を挟んで1923（大正12）年に再び本科への入学者があらわれる。その後は毎年絶えることなくどこかの学部に本科生として女性が入学する状況が続くようになる。

1923年以降女子学生の入学が続くのは、この年に法文学部が開設されたことが大きい。法文学部、とりわけ文科への入学者は1923年以降一度も絶えることなく続いている。一方理学部のほうは、1923年から25年にかけては毎年一定数の入学者があるもののその後は断続的となり、1940年代半ばになってから再び増加する。この点は他大学における女子学生受入の動向と関連すると考えられる。この点は後述する。この傾向は表２においても基本的には変わらない。ただ表２でわかるように、1922（大正11）年に理学部に２人の女性[(8)]が「聴講生」として入学しており、本科生としての入学が再び始まる一年前に先行して聴講生としての入学が再開されていた。

本科生と聴講生

聴講生２人が理学部に入学した1922年の時点で、本科生としての女性の入学を認めた実績を持つのは当の東北帝国大学理学部のみであったが、聴講生（ないし撰科生）としての入学はすでに1920（大正９）年から東京帝国大学が実施しており、ある意味ではこれにならったものということも出来よう。

しかし東京帝国大学の女子聴講生が本科への編入を一切認められなかったのに対し、東北帝国大学では、1922年の聴講生２人が翌年本科に編入されたのをはじめ、1950年までに聴講生として入学した者は合計27名のうち実に24名が本科生となっており、その位置づけは全く異なるものとなった。

聴講生の制度は、1919（大正８）年大学令に基づき分科大学が学部と改められた際、従来の撰科生制度に相当するものとして設けられた制度で、理学部規程（大正八年七月十一日施行）には「本学部ノ科目中一乃至数科目ヲ選ヒ聴講セント欲スルモノニシテ相当学力アル者ハ聴講生トシテ之ヲ収容スルコトアルヘシ」（第五十一条）、「聴講シタル科目ニ就テハ希望ニ依リ授業担任者之ヲ証明ス」（第五十二条）と規定された。一方法文学部では、法文学部規程（大正十二年一月一日施行）に「聴講生タラントスル者ハ中等学校以上ノ学校ノ卒業者タルコトヲ要ス（下略）」（第四十一条）、「聴講生ニシテ聴講シタル科目ニ就キ試験ニ合格シタル者ニハ修業証書ヲ授与ス」「聴講生ニシテ成績優良ナル者ハ第六条第一項第二号ノ検定試験ヲ受クルコトヲ得」（第四十三条）と規定される。ここでいう検定試験とは、法文学部規程第六条第二項に「本学部ニ於テ適当ノ学力アリト認メタル者ニシテ本学部ニ於テ臨時施行スル検定試験ニ合格シタル者」と定められている検定試験を指し、本科に編入できることが規程上でも明確にされている。

実際にも、法文学部では聴講生20人中19人が本科編入と、ほぼすべての学生が本科に編入しており、少なくとも女子学生についていえば、聴講生制度は、本科入学のサブ・コースとしての意味を持っていたということができる。たとえば1927（昭和２）年に聴講生とした井上初子（俳人・柴田白葉女　宮城県第二高等女学校高等科卒）は、２年間聴講生として在籍した後に本科生となっているし、日本放送協会の女性アナウンサーが帝大生になったと当時も話題になった（河北新報昭和４年４月18日）石母田（橘内）英次（宮城県第一高等女学校・尚絅女学校高等科）も1929年に聴講生として入学し翌年本科生となっている。女子学生のみをみての結果であるが、聴講生入学者の中には公立・私立の（高等）女学校高等科等の出身者が多く、高等師範学校や専門学校を卒業していない学生を入学させる際の身分という側面もあるようである。

一方理学部では７人の女子聴講生が確認でき、そのうち５人が本科に編入している。理学部

表３　本科入学女子学生の出身地（出身高等女学校の所在地）

	宮城	東北	北海道	関東（山梨）	東海北信越	関西	中四国	九州	外地	中国	朝鮮	不明
1913						1		2				
1914～22　本科生としての入学者なし												
1923				2	1		2					
1924		1		1		2						
1925		1		2	1	2	1		1			
1926				1	1							
1927							1				1	
1928				1	2							
1929	1			3			1		2			
1930	1				2							
1931				1				1		1		
1932	1			4			1					
1933	1			1		1	1					
1934	1		1	2		1						
1935				3								
1936					1		1			2	1	
1937	2				1				1		1	
1938	1	1		1								
1939						1						
1940	2			1								
1941				2						1		
1942	1	1	1	3		1			1			
1942-10			1	3		1				1		
1943-10	1			2	1	4			2			
1944-10		2		9	1	3	1		1			
1945	5		1	5	1							1
1946	6			2								
1947	9	1		1	2							
1948	7	1	1	3								
1949	7	2	1	1								
1950	3	5	1	1	1							
合計	49	15	7	55	15	17	9	3	8	5	3	1

の場合は本科生にならず聴講生として長期間在学する者もいるが、一方で本科に接続するコースとして利用されてもおり、法文学部ほどの比重は持たないにしても、やはり同じような意味でも活用されていたということができよう。

(2) 入学までの履歴

出身地

東北帝国大学に入学した女性たちは、どのような経歴を持っているのか。まず出身地域についてとりあげたい。出身地域については当時の各種の名簿資料に本籍地の都道府県が記されているが、必ずしも実際に育った場所を示すとは限らない。そこでを本稿では本科生として入学した女子学生たちの卒業した中等学校（高等女学校・女学校・師範学校）の所在地をとりあげまとめた（表３）。入学年は本科生としての入学年次を記している。

全体としては、東北地方出身者64（宮城49、その他15）が最も多く次いで関東地方出身者（55）がつづき、北海道含めこの３地域で全体の３分の２を占める。ただし東北とりわけ宮城県の女学校出身者はその４分の３が1946年以降に集中しており、1945年以前で区切って集計すると関東

出身者47、東北出身者23、関西17、東海北信越12、中・四国９といった集計値となる。ちなみに1946年から50年までの数値は東北41（うち宮城32)、関東８、北海道・東海北信越各３となる。

つまり戦前・戦中期においては東北帝大に入学する女性は関東圏を中心に広く全国から集まっていたということができる。戦争終結後に関東出身者の数が低減し西日本出身者が皆無となるのは、1945（昭和20）年12月の「女子教育刷新要綱」を受けて東京・京都などの帝国大学でも女子学生の受入が開始された事にかかわる動向であろう。一方で地元宮城県出身者の増加が著しいことも注目される。

出身学校（入学直前の学歴）

次に、東北帝大入学前の高等教育レベルの出身学校の状況についてみてみたい。個々の学校の数値としては東京女子高等師範学校卒業者、宮城県女子専門学校卒業者がともに30名と多く、次いで東京女子大（23)、津田塾（21)、日本女子大（20）と続く。このうち私立女専については比較的絶え間なく継続的に入学しているといえよう。宮城女専は逆に戦争末期から戦後にかけて増えており、これは前述した宮城県出身者の戦後における増加という傾向ともつながるものであろう。

一方、東京女子高等師範学校の場合、1910から20年代と1940年代半ば以降に数がみられるが、30年代から40年代初頭にかけてはきわめて稀な入学状況となっている。1930年代における入学者減少は、1929（昭和４）年に東京・広島の文理科大学が設立されたことによるものであろう。文理科大学の開学以前は、女高師出身者にとって東北帝大がほぼ唯一の進学可能な大学だったが、東京文理科大学はその創設以来、入学の第一次有資格者として高等師範学校、臨時教員養成所卒業者と同格で女子高等師範学校卒業者があげられており、女高師出身者にとっては、高等学校卒業者で余った定員を第二次選抜として官立・私立の専門学校卒業者含む多くの入学志願者で争う東北帝国大学よりも、第一の有資格者として受け入れてくれる文理科大学への進学の方がはるかに自然なルートであったと思われる。

先に見た、理学部における女子入学者の減少という傾向も、同じ要因が関わっているものと思われる。当時、日本女子大学のように家政学の一環として理科系の教育をおこなう私立女子専門学校もわずかながら存在したが、ほとんどの私立女専は文科系分野を中心とする学校で、理学部に入学する女子学生の主体はやはり女子高等師範学校出身者であった（1925年までに聴講生ないし本科生として入学した学生生徒合計12名のうち10名が女子高等師範学校出身者)。よって女高師理科―文理大の理系学科というコースが形成されると、東北帝大の理学部は女子学生の重要な進学元を絶たれることになった。実は理学部では1925（大正14）年に入学試験免除となる指定学校に女子高等師範学校を指定したのだが、その効果は残念ながらその後しばらくは発揮されなかったと言って良い。1929年から1930年代にかけて理学部に入学した女子学生生徒は４人いるが、その内訳は東京・奈良の女高師各１人と、中国の大学（北京師範大学・浙江大学）卒業者各１人である。

なお、東北帝国大学を卒業した女子高等師範学校や女子専門学校の教員の中には、その教え子に東北帝大への進学を勧めたという事例をいくつか確認できる。たとえば1922（大正11）年理学部数学科に入学した江角ヤスは、東京女高師学校在学中に、東北帝大を卒業して東京女高師範の教員に復帰していた牧田らくの教えを受けており、東北帝大進学に際しても牧田の助言

表４　本科入学女子学生の入学前最終学歴

本科	女高師		公立女専		私立女専・高等女学校高等科等														その他					
入学年	東京女高師	奈良女高師	宮城女専	大阪・京都・福岡女専	日本女子大	東京女子大	津田塾	実践女専	和洋女専	梅花女専	金城女専	梨花女専	帝国女子理・医薬専	東京女子医専	宮城女学校・女専	尚絅女学校高等科	神戸女学院高等部	他の高女高等科等	東北帝国大学	山形高等学校	高等女学校	中国の大学	中等教員検定	その他・不明
1913年	2				1																			
1914～1922年は入学者なし																								
1923年	3	1			1																			
1924年	3				1																			
1925年	3	1				1	1														2			
1926年						2																		
1927年						1						1												
1928年	1					1													1					
1929年	2		1		2	1		1																
1930年						1										1		1						
1931年	1			1																		1		
1932年						2	2	1							1									
1933年				1	1	1	1																	
1934年	1		1		1	1		1																
1935年					1		1		1															
1936年					1	1						1										2		
1937年		1	2									1									1			
1938年				1				2																
1939年		1																						
1940年			1					1											1					
1941年						1	1																	1
1942年			1		1	2					1						2				1			
1942年10月	1				2		1	1													1			
1943年10月			1	1	2	1	1	1		2											1			
1944年10月	3	2	2	1	2	2	3	1			1													
1945年	1		2		1	1	3				1		4											
1946年			3			2								1	2									
1947年	3		6			1	2				1													
1948年	1		4			1	2								2						1		1	
1949年	1		4		2		2								2									
1950年	4		2		1		1								1				1	1				
合計	30	6	30	5	20	23	21	9	1	2	4	3	4	1	8	1	2	1	3	1	7	3	1	1
	36		35		100														16					

東北帝大卒業後再度入学した者は、一回目で大学入学前の最終学歴、二回目で大学卒として扱っている。

があったという。そうした縁もあってか、江角は牧田（金山）が晩年に夫金山平総三に先立たれたあと、一時期江角が理事長をつとめる純心女子学園（八王子）の構内に金山の居所を提供し世話をしていたという。そうしたかたちで女子学生が連鎖的に東北帝大に進学していたことにも注意しておく必要がある。

職歴

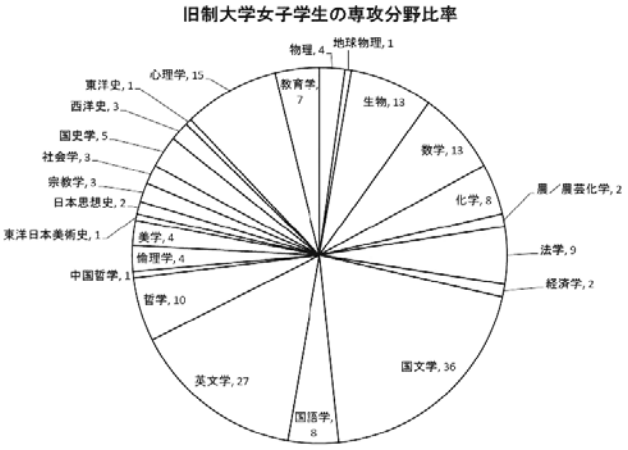
入学前の職歴については正確を期し難いが、『学生原簿』の記載をもとにすると、合計50人について入学前に何らかの職歴を有することが確認できた。

職種の種類としてはやはり学校教員が一番多く、高等教育機関（高等師範学校・専門学校）の教員経験を持つ者が11名、中等教育機関（女学校・高等女学校・師範学校）での職歴を持つ者は25人に及ぶ。ほかに東北大学職員としての経験を持つ者が６人いる。その他は極めて少ないが、前述した石母田英次のようにNHK職員を辞して入学した者も２名確認できる。

高等教育機関在職者の中には、先に触れた黒田チカや牧田らくのように、卒業後再び元の職場に戻ることを前提にした、いわば現職教員のキャリアアップを目的とした入学も含まれているようである。黒田や牧田以外では、1928年に法文学部国語学専攻に入学した中村（河野）多麻が、実践女学校在職中に東北帝大に入学、卒業後再び実践に戻り女子専門学校教授に就任するなどの事例がある。一方高等女学校教員の経験者には女子高等師範学校の卒業が多数含まれ、これは女高師卒業生に課された高等女学校や師範学校等での服務義務を果たした事例と見ることが出来る。

(3) 専攻分野

次に、入学後の専攻学問分野について。旧制課程入学者における専攻分野のあり方を円グラフで右図に示した。



理系では理学部・農学部（1947年以降）が受入学部となるが、生物・数学・化学の３分野が多く占めている。大正２年に入学した女子学生が化学（２名）、数学（１名）であったことはよく知られているが、1922（大正11）年に聴講生として入学し翌年本科に入学した学生もやはり数学科であった（江角ヤス・金光栄）。一方生物学科は1921（大正10）年に開設された学科であるが、1924（大正13）年に東京女高師教員の聴講生１名を入れ、翌年には本科生２人を入学させるなど大正期からやはり女子学生の受入れをおこなっている。

一歩の物理系学科では、女子学生の受入は1942（昭和17）年の東京女高師出身学生が最初の受け入れと、受入の開始は遅かった。実は物理学科を志望する女子学生は早くから存在していて、黒田チカ等の入学時に於いても、受験の段階では合格した３名の他にもう一人物理学科を受験した女子学生がいたことが知られている。また1923（大正12）年に数学科に聴講生として入学しその後本科に編入された森本治枝は、当初物理学科に出願したものの試験直前に数学科への志望変更を大学側から求められ仕方なく応じたという。その時の理由は、森本に依れば、物理学科主任教授で理学部長でもある小林巌教授から「女子学生（の志願者）が一人だと、どうしても男女を組にして暗室実験をさせなければならなくなってしまう。当教室は最近石原純教授の恋愛事件もあって、世間の注視を集めている折でもあり、あなたの受験について色々考えなければならぬことが多くてみんなで相談したのだが、この際あなたの願書を数学教室に出

し替えてはどうか。」と説明を受けたという[(9)]。事の真相は措くとしても、学科によって女子学生の受け入れに温度差があったことは認められる。

文科系では圧倒的に文科（人文科学系）が多いが、社会科学系（法科・経済科）等の専攻学生も少ないながら存在する。人文系では国文学を初めとする文学系が最も多く、ついで心理学・哲学等が続くが、比較的多分野にわたって入学しているといってよいであろう。

(4) 進路状況

就職・進路の状況は、彼女たちの大学進学の「結果」を測るデータとして重要である。これを体系的・網羅的に把握することは難しいが、いくつかのデータをあげておく。

表５は、『文部省年報』に掲載された、東北帝国大学創立（1911年）以来昭和８年度までの卒業者の1934年（昭和９）年３月現在の状況を示すデータである。ただし女子学生のいない医・工学部は省略してある。この表からも一目瞭然であるが、女子学生の進路として圧倒的に多いのが学校職員（教員）である。逆にいえば、帝大での女子学生の就職先としては、専門学校や高等女学校の教員がほぼ唯一の進路でありそれ以外の職種はほとんど開かれていなかったと言って良い。

当館所蔵の名簿資料等で拾いあげたところでは、1945年までの本科入学者で卒業した114名の中で、学校教員（大学・専門学校・女学校等）の職歴を卒業後一度でも持った者は75名。研究所研究員などの職歴は10名、官庁・公務員が９名、司法関係が１名、マスコミが２名、一般企業１名を数えることができた。もちろんこの数値はかなりの遺漏があると思われあくまで参考にしかならないが、やはりおおよその傾向は反映しているとみてよかろう。

表５　東北帝国大学理学部・法文学部卒業者の就職状況（昭和９年３月現在）

	理学部		法文学部	
	男	女	男	女
行政官吏	0	0	181	2
司法官吏	0	0	44	0
官庁技術員	235	1	0	0
陸軍幹部候補生及び兵役	14	0	0	0
弁護士	22	0	0	0
学校職員	321	9	192	16
銀行会社員	269	0	0	0
新聞雑誌記者	2	0	20	0
その他	2	0	60	0
大学院学生	40	2	8	0
他学部学生	16	0	53	1
外国留学	11	0	0	0
未定不詳	137	1	289	5
死亡	20	0	20	0

二、東北帝国大学における女性研究者

次に、「女性研究者」という観点からデータを整理していくこととしたい。とはいっても、大学における「研究者」の在籍の在り方は、分野によっても、また時期によっても多様である。ここでは在籍の身分ごとに、分野や時期での相違に注意しながら状況を整理することとしたい。

(1) 専攻生

最初に、短期の研究生制度である「専攻生」について述べる。専攻生は、東北帝国大学通則に「学部教官ノ指導ヲ受ケ特殊ノ事項ニ就キ研究セントスル者アルトキハ学部ノ定ムル所ニ依リ専攻生トシテ入学ヲ許可スルコトアルヘシ」（第四十一条）と定められた、教授の指導下に特定の研究テーマを攻究する短期の研究生制度である。制度的区分としては聴講生同様「生徒」に含まれるが、聴講生と異なり特定の研究テーマを設定するということで、「研究者」の範疇でとりあげることとする。

ただしその運用には、学部ごとにかなりの違いがあった。まず理学部はそもそも専攻生の制度を定めていない。前章で述べたように理学部には若干ながらも長期にわたって聴講生として在学する学生がおり、これが他学部での専攻生的存在であったのではなかろうか。

医・工・法文の三学部は、それぞれの学部規程の中で独自に専攻生制度を定めている。まず医学部規程では「本学部授業担任者ノ指導ヲ受ケ特殊事項ニ就キテ研究セントスル者アルトキハ専攻生トシテ入学ヲ許可スルイコトアルヘシト」とし（第十九条）、

①帝国大学卒業者ないし大学令により学士号を称することが認められている者

②専門学校卒業者

③授業担任者が適当の能力があると認めた者

を資格としている。①の「大学令により学士号を称することが認められている者」とは、特定の医学系の専門学校卒業者に対し「〇〇専門学校医学士」など学校名を付して学士号を称することができることとなっており、こうした例を指している。

医学部に入学した女性の専攻生としては、1931（昭和６）年10月に２名の入学したことが確認できる。このうちの１名は吉原リュウという女性であるが、彼女は1920（大正９）年に東京女子医学専門学校を卒業したあと米国に渡り、1927年アリゾナ州、1928年ハワイ州の医師開業試験に合格。その後1928年から30年までベルリン、1930年フライブルク大学に入学し1931年に同大学の学位を取得していた。同年12月に東北帝国大学医学部に「専攻生」という身分で入学するが、翌年に学位論文を提出して学位を得ており、専攻生入学はこの学位論文をまとめることを目的にしたものとみられる。論文自体は欧米滞在中の研究成果を骨格としたものであろう。医学部では、このように、医師経験を積んだ者が学位論文をまとめるために専攻生制度を利用している例が多いようである。もう１人の女性は学歴など詳細は不明で東北帝大での学位取得には至らなかったようだが、おそらくは似たような経歴を持っていたのではないかと思われる。

工学部のばあい、規程では「本学部ニ於テ或科目ニ就キ研究セント欲スルモノニシテ関係科目担任教官ニ於テ相当ノ研究能力ヲ有スト認メタル者」を専攻生として受入れることとなっている。女性専攻生として１名の在籍が確認できるが、これはタイシア・スタドニチェンコというロシア人女性で、工学部化学工学科の井上仁吉教授の下で石炭の化学的研究をおこなったという。東北帝大入学前すでにペテログラード第一女子大学を卒業し、イリノイ大学等に在籍して研究した経験を持っており米国大学での研究歴を持つという点では前記の吉原と共通している。学位を取得してはいないが、念頭に置いていた可能性もあろう。なお彼女は1921年のワシントン会議に、当時のウラジオストク政府代表の秘書官兼通訳として随行している[(10)]。

法文学部規程は医学部規程とほぼおなじ書きぶりである。女性専攻生としては、18名の在籍が確認できる。そのあり方は多様だが、およそ三つに区分して説明できるように思う。第一は、

法文学部本科を卒業したあと入学した学生。４名おり、うち１名は専攻生入学後まもなく大学院に入っている。これらは学部の卒業研究の延長、ないしは大学院に準じる研究の場としての入学、ということができよう。

次に、学部本科生ではない日本人女性７名。彼女たちは具体的な学歴は不明ながら学士号を持たないことは確かである。おそらくは専門学校等の卒業生で、学部本科への入学を希望しなかったのであろう。これは、法文学部の聴講生制度が前述のように事実上学部本科への編入を前提に運用されていたことと表裏の関係にあるのかもしれない。

三つ目のグループとして、1936年から37年に集中する中国人女子専攻生が挙げられる。特徴的なのはその専攻分野のあり方で、それ以外の日本人学生がほとんどすべて文学や史学・哲学など人文科学系の学問であるのに対し、彼女たちの専攻は法科や社会学など社会科学系の学問が多く、見事な対照をなしている。この時期はちょうど全国的にも第三次の中国人留学生の来日ブームに重なっており、東北帝国大学でも大量の中国人学生が、特に専攻生として入学している。中等教育末期―専門学校や高等学校の予備教育の段階から来日し長期にわたって滞日する傾向を持っていた1910年代から20年代における中国人日本留学生に対し、30年代の中国人留学生は中国で専門学校や大学の教育を受けた後一種のセカンドキャリアとして短期留学を行う事例が増えると指摘されており[(11)]、東北帝大の中国人専攻生もその典型例の一つと言えるであろう。

表６　女性専攻生の在学状況

学部	在学年		学科・専攻／研究テーマ（指導教授）	入学前の主要学歴・資格
医学部	1932	吉原リュウ		東京女子医学専門学校卒業、フライブルク大学博士号アリゾナ・ハワイ州医師免許
	1932	角田きん		
工学部	1920-22	タイシア・スタドニチェンコ	化学工学／鉱物化学（井上仁吉）	
法文学部	1931-32	井上初子	国文学（岡崎義恵）	東北帝国大学法文学部卒業
	1927-32	鈴木（古藤）キヨシ	不明	
	1934-35	三谷文子	英文学	
	1937	堀内操	哲学	東北帝国大学法文学部卒業
	1939	趙淑卿（朝鮮）	英文学（土居光知）	梨花女子専門学校卒業 東北帝国大学法文学部卒業
	1937-37	中村菊代	英文学	
	1936-37	蕭　素彬（中国）	法科	北平朝陽学院法律系
	1936	姚　明華（中国）	社会学	上海風文学院日本大学社会教育専攻科
	1936	荘　孝和（中国）	法科	山東省立女子師範学校 奈良女子高等師範学校中退 日本大学専門部研究生
	1936-37	張　競淑（中国）	法科	北平郁文大学卒業
	1936-37	湯　蘭芬（中国）	教育学	浙江公立法政専門学校文科 日本大学高等専攻科
	1936-37	褚　保嬉（中国）	教育学	北平私立慕貞女子学校卒 日本大学高等専攻科
	1941	阿部美智子	国文学	実践女子専門学校 東北帝国大学法文学部卒業
	1941	辻秀子	不明	
	1943-44	神足昌子	日本思想史	
	1943-44	佐藤道子	国文学	
	1943	渡會美和	国史学	
	1944	平能なほ	国語学	

(2) 大学院学生

次に大学院生について。大学院は帝国大学令（1886年）において「学術技芸ノ蘊奥ヲ攷究」する場と規定され、大学令（1919年）では各学部に設置される「研究科」の「連絡協調ヲ期スル為之ヲ綜合シテ」設けるものとされる。「東北帝国大学通則」（大正十一年二月五日施行）には「医学を修ムル者ニ在リテハ四年以上其ノ他ノ者ニ在リテハ三年以上学部ニ在学シタル者ニシテ大学院ニ入ラント欲スル者ハ其ノ研究事項ヲ具シ総長ニ願出スヘシ総長ハ相当学部ノ教授会ノ議ヲ経テ之ヲ許可ス」（第四五条）「前条に該当セザルモノニシテ大学院ニ入ラント欲スル者ハ其ノ研究事項ヲ総長ニ願出ヅベシ総長ハ相当学部教授会ノ議ヲ経テ学力ヲ検定シ之ヲ許可ス」（四五条）と定められたが、少なくとも女子学生の場合は現実にはすべて東北帝大本科の卒業生で占められており、四五条が適用された事例はないようである。なお在学期間は二年以上五年以内とされ、在学期間中は「当学部において専心研究に従事」するものとされていた。

表７　女性大学院学生（1945年以前）

	専攻分野	大学院入学年	研究テーマ（指導教官）
丹下ウメ	理／化学	1918	有機化学一般（眞島利行）
黒瀬（久保）ツヤ	文／哲学	1925	思惟作用の発達（千葉胤成）
石原（小川）文代	理／生物学	1928	蚯蚓類の神経系統に関する研究（畑井新喜司）
高木（及川）フミ	理／生物学	1928	細胞学
三浦（青山）なを	文／日本思想史	1931	女性精神史（村岡典嗣）
林　瑞栄	文／国文学	1932	近世における文学観（岡崎義恵）
相馬　恵美子	文／心理学	1935	心理学の方法（千葉胤成）
北島（明城）光子	文／心理学	1936	幼児の社会的行動について
桜井（中川）時代	文／心理学	1937	女子青年の心理学的研究
松村　緑	文／国文学	1936	詩歌史の研究（岡崎義恵）
小糸（森岡）美子	文／東洋史※	1938	六朝時代美術の研究（岡崎文夫）
木村（安倍）俊子	文／国文学	1940	国文学（岡崎義恵）
林（兼田）愛子	文／国文学	1941	日本小説史（岡崎義恵）
中川　千代子	文／英文学	1945	英国中世文学（土居光知）

※小糸美子は学部学生時代は国史学専攻

1945（昭和20）年以前の大学院入学者で限ると、東北帝国大学では合計14名の大学院進学者を確認することができる。最初の大学院進学者は丹下ウメ。丹下は1918（大正７）年７月に化学科を卒業後そのまま大学院に進学した。おそらくは女性初の大学院学生であろう。専攻分野（所属研究科）は理学部と法文学部の分野に限られ、文科系（法文学部文科）の学生が圧倒的に多い。卒業者中の比率でいうと、法文学部文科では女性卒業者中123人中の11人（約９％）。理学部では33人中３人（9.1％）と、だいたい同じようなパーセンテージとなっている。

(3) 助手

「助手」は大学以外の高等教育機関にも存在しその性格は機関ごとにことなるが、帝国大学の助手は「教授助教授ノ指揮ヲ承ケ学術技芸ニ関スル職務ニ服ス」（東北帝国大学官制　1910年）、「各学部ニ分属シ教授助教授ノ指揮ヲ承ケ学術ニ関スル職務ニ服ス」（同条1919年改正）と職務を官制上に規定された正規の教員身分である。ただし「助手」の任用資格を定めた全学的な規定などは特に存在しない[(12)]。現実には各部局の教授会の判断に委ねられている部分が大きかったのであろう[(13)]。

表８　女性助手（1946年以前）

氏名	在任学部学科 在任期間	助手就任前の最終学歴・職歴	備考（助手退任後の主な履歴など） （東北帝国大学の場合大学名省略）
丹下ウメ	工学部応用化学科 1920か	1918 理科大学卒同大学院	日本女子大教授
赤羽美智子	法文学部法科助手 1934年	1932 東北帝国大学法文学部卒法文学部副手	公正取引委員会委員
柿田八千代	金属材料研究所助手 1941年～	帝国女子医学薬学専門学校薬学科卒 1937 医学部附属病院薬剤部 1940 金属材料研究所研究補助	金属材料研究所助教授 （1954-73）
千葉定子	金属材料研究所助手 1941年～	金属材料研究所研究補助	
須藤恵美子	金属材料研究所助手 1941年～45年３月	帝国女子医薬学専門学校卒金研研究補助 （1940-）	1945 理学部生物学科入学（卒業） 1948 理学部卒、大学院特別研究生 1950 金属材料研究所助手 1956 金属材料研究所助教授 科学技術庁金属材料研究所
塚本　柳	工学部電気工学科助手 1943～45年３月	帝国女子医薬学専門学校卒 電気通信研究所研究補助 工学部電気工学科副手	1945 理学部生物学科入学 S23卒 1948 理学部卒、大学院特別研究生 岐阜大学学芸学部助教授 名古屋大学医学部教授
中村恭子	金属材料研究所助手 1943年～？	東京女子薬学専門学校卒 金研研究補助	
大高治代	金属材料研究所助手 1943年～？	共立女子薬学専門学校卒 金研研究補助	
山本文子	選鉱製錬研究所助手 1943年～？	不明	

＊このほかに1943年に金研助手に任命された女性が１名いるが、雇身分からの任用でかつ書記（経理）との兼務であるため、実質的には事務系職員であったと推測されるので除外した。
＊1944・1945年については職員録等の名簿資料が存在しないため、その時点での在任者を確認できていない。
＊出典：『東北帝国大学一覧』『東北帝国大学職員名簿』『学生原簿』『自修会会員名簿』

『東北帝国大学一覧』および各種名簿資料をもとに1946（昭和18）年以前に在任を確認できる女性助手は９名を数えた（表８）。1913年に化学科に入学した２人の女性のうち、丹下ウメは前述のとおり卒業後大学院生となったが、その後短期間工学部化学工学科の助手となったようである[14]。しかしこの表をみてもわかるように、1930年代までは女性の助手任用の事例は極めて少なかったことがわかる。

一方、1940年代に入ると女性の助手が多数確認できることもわかる。しかもその所属部局は、金属材料研究所を中心とする研究所や工学部など、女性の卒業生を持たない（そもそも研究所に卒業生は存在しない）部局であった。

1930年代までの助手と比較した場合、以下のような履歴を持つ者が多い。

（1）帝国女子医学薬学専門学校など、医薬系の女子専門学校卒を最終学歴とする女性が多い。前述のように戦前の助手制度は副手制度と密接な関係にあり、建前としては大学を卒業した学士を採用することを原則としていた。むろん実態としては学士号を持たない者も採用されていたが、女性に限って言えば学士号を持つ者がわずかに採用されているというのが実態であった。しかし1940年代の各研究所の助手はあきらかにこの原則とは一線を画している。実は時を同じくして金属材料研究所では昭和17年11月25日教授会で助手の任用に関する内規を定め、採用資格を

①大学または専門学校卒業者

②中学校または甲種工業学校卒業者は五か年以上研究または実務に従事し成績優良なる者

と規定した[15]。つまり助手の任用は専門学校卒であれば問題なく、さらに中等学校卒業者でも実績をあげれば助手に任用できることとした。なお前述のように1942（昭和17）年には大学の副手規程が改正されて大卒者ではなく「学生」から採用するとされており、助手や副手への任用資格の緩和がこの時期図られていたことがわかる。おそらく戦時下における相次ぐ研究所の設置・増設と一方で増えていく教職員の応召などとのかかわりで、特に研究所等では研究開発業務をサポートする職員の確保に苦心しており、そのためにこうした措置が図られたものと思われる。

（2）助手任用の前歴として、「研究補助」等の経歴を有する者が少なくない。

戦時下の理工系の学部や研究所には、教官や副手などの下で研究活動をサポートする「研究補助」「実験補助」等の職員が多数配置されていたが、その中には女性も少なからず見受けられる。研究補助となった女性たちの調査分析は今回行うことができなかったが、おそらくは表７に掲げられている事例と同様、理科系・医薬系（薬学系）の専門学校卒の経歴を持つ女性たちが多数こうした「研究補助」として在籍していた。医学部附属病院の「医員介補」という職も、ある意味ではこれに近い意味を持ったといえるかもしれない。このような補助的な研究職として採用された後、そこで能力を認められた者がやがて助手に任用されていく、という道筋が、特に戦時下の科学動員体制の中で形作られ、その中で女性たちが助手ポストを得ていった、ということができる。

ではいったいこのような助手ポストは、「女性研究者」のキャリアとしてどれほどの意味を持ったのだろうか。表８にあげられた中からいくつかの具体的な事例を追いかけてみよう[16]。

まず1941（昭和16）年に金研の助手となった柿田八千代について。彼女は1935（昭和10）年帝国女子医学薬学専門学校（現東邦大学）薬学科を卒業し薬剤師免許を取得、その後すぐに東北帝国大学医学部附属病院の薬局に調剤員として勤務し、岩手県の胆澤病院での勤務を経て1937（昭和12）年には再び医学部附属病院に復帰、調剤員として「薬局試験室」に勤務する。このように柿田は当初調剤師としてのキャリアを重ねた女性であった。しかし1940（昭和15）年、彼女は大学病院を辞職し金属材料研究所に研究補助として採用される。その経緯は不明だが、金研では後藤秀弘教授の研究室で金属の化学分析を主な仕事としたようで、あるいは薬学で培った化学的知識がこの分野で活かされたのかもしれない。おそらくその実績が認められたのであろう、翌1941年に同研究所の助手に就任し、1945（昭和20）年４月には日本鉄鋼協会の香村賞を受賞するなどその業績が高い評価を得たようだ。そして戦争が終わった一年後の1946年８月、学位論文「砒素の定量分析法の研究」を東北帝国大学理学部に提出、女性博士となった。理学博士は柿田以前に東北帝大で三人の女性が取得しているが、いずれも理学部を卒業した学士で、学士号を持たない女性理学博士は東北大学では柿田が最初である。なお柿田はその後も助手として金研に在職し、1954（昭和29）年に至って助教授に昇任した。

次に、1943年に工学部の助手となった塚本柳（のち只野姓）について。彼女も柿田同様帝国女子医薬専薬学科の卒業で、卒業後は仙台地方専売局で医務に従事していたように、やはり当初薬学系のキャリアを積んでいた。しかし1942（昭和17）年５月に通研の研究補助となり、同年11月に工学部電気工学科の副手、1943（昭和18）年７月に助手になっている。通研に勤務することになった経緯や工学部での彼女の業務がどのようなものであったのかわからないが、工学部では丹下ウメ以来の女性助手であり、やはり通研での働きぶりが認められての採用であろう。

しかし彼女の場合は、そのまま工学部や通研にとどまるのではなく、異なるステップを踏んだ。1945（昭和20）年春、彼女は工学部助手を辞め、理学部生物学科に学部生として入学したのである。

その後1948（昭和23）年に学部を卒業すると、その年に「線虫の実験発生学的研究」というテーマで大学院特別研究生に採用、その後岐阜大学を経て名古屋大学医学部解剖学の教授となっている。彼女の場合はあらためて、帝大卒という正系の研究者ルートを選び直したといえようか。

（4）副手－1940年代の医学系を中心に

副手は、職務は助手とほぼ同内容ながらも各大学が独自に任用する身分で、無給が原則であった。東北帝国大学では創立と同時に「東北帝国大学副手規程」を制定しており、下記の事項を定めている。

①無給である（ただし特別に手当てを支給することがある）

②大学院又は分科大学を卒業した者、ないし「分科大学助手タルコト得ル」者が志願できる。

③職掌は分科大学助手と同じ

④二年以上職務に服し業績をあげた者には総長が証明書を発行する

②に「分科大学助手タルコト得ル」とあるが、前述のように「助手」の任用資格を定めた全学的な規定などは特に存在しない[17]。この規定はその後も「分科大学」を「学部」とした以外は変更なく1942（昭和17）年まで受け継がれたが、昭和17年に改正され、②の部分が「学生およびこれに準ずる身分の者の中から当該部局長の稟申により総長が委嘱する」とされ、卒業していない学生や「これに準ずる者」を任用できるようになった。

副手については、『大学一覧』その他の名簿資料の掲載基準にも年度によって変化があり、必ずしも網羅的な調査ができていない。確認できる最初の事例は、1913年（大正２）に入学した３人のうちの一人、黒田チカ。黒田は理学部を卒業すると同時に副手となり引き続き二年間大学に在籍、眞島利行教授の指導の下で卒業研究として着手した紫根の色素シコニンの研究を完成させ、その後母校東京女子高等師範学校に復職した。次の事例は表８でも登場した1932（昭和７）年の赤羽（有賀）美智子で、法文学部法科の公法研究室で副手を勤めたようである[18]。ただし彼女の在職は助手とあわせても一年のみで、その後は研究職を離れている。戦後官庁勤務を経て公正取引委員会事務局となりやがて女性初の公正取引委員となった。1930年代前半ころまでまで確認できるのはこの２人だけで、やはり助手同様かなり限られていたのではないかと思われる。

しかし少なくとも1930年代の末までには、医学部（附属病院含む）において、女性の副手が誕生している。これに関連して注目されるのは、1940年代以降、医学部の副手経歴をもつ女性医学博士が登場してくる点である。

東北帝国大学の女性医学博士は、1931（昭和６）年に井出ひろが取得したのが最初である。井出ひろは、東京女子医学専門学校を卒業後、母校の解剖学教室助手を経て1921（大正10）年夫とともに渡米しワシントン州ワシントン大学に留学。その後ワシントン州医術開業試験に合格しシアトルで開業のかたわら、米国各地の病院を視察、1927（昭和２）年にはペンシルバニア大学ウィスター研究所の客員として研究に従事した。1931（昭和６）年３月に東北帝国大学

表９　女性学位取得者 - 理学博士（1948年以前）

区分	氏名 授与年月日	題目	最終学歴	調査委員	主な職歴
理博	黒田チカ 1929.11.18	カルサミンの構造に就いて	1916 東北帝国大学理科大学卒 1916 東北帝国大学理科大学副手 1918 東京女子高等師範学校教授	眞島利行 野村博	お茶の水女子大学 教授
	小川文代 1938.4.6	蚯蚓の幼生より成長に至る迄の神経系統に関する研究	1928 東北帝国大学理学部 1928 東北帝国大学大学院（～1932）	畑井新喜司 ほか	共立女子大学 教授
	吉田武子 1942.6.12	アンモニアと二酸化炭素の反応動力学	1927 東北帝国大学理学部卒 1927 理化学研究所研究生 1929 京都帝国大学化学研究所研究嘱託 1929 同上研究員（～1940） 1937 宮城県女子専門学校教授 1937 東北帝国大学理学部講師嘱託	小林松助 富永斉 石川総雄	お茶の水女子大学 教授
	柿田八千代 1946.8.30	砒素の定量分析法の研究	1935 帝国女子医学薬学専門学校卒 1935 東北帝国大学医学部附属医院調剤員 1936 胆沢病院勤務（調剤担当） 1937 東北帝国大学附属医院調剤員 （薬局試験室勤務） 1940 東北帝国大学金属材料研究所研究補助 1941 東北帝国大学金属材料研究所助手	小林松助 富永斉 石川総雄 後藤秀弘	東北大金属研助 教授

に提出した学位論文（主査布施現之助）は、こうした長期にわたる海外での業績の成果とみられる。これにより我が国５人目の女性博士、２人目の女性医学博士となった。1932（昭和７）年に医学博士となった吉原リュウはについては専攻生の項で前述したが、やはり米国での開業・研究の経験を経て帰国、翌年学位を取得した。つまりこの２人は、長期にわたる米国らでの研究経験を基盤に学位を申請した事例ということができる。

一方1940年代に取得した事例は、大学病院や医学部に女性医師として勤務する傍ら研鑽を積んだ成果が学位論文となったとみられる。たとえば1941（昭和16）年に医学博士となった三上秋子・大山文路は、ともに帝国女子医学薬学専門学校を卒業したあとすぐに東北帝国大学医学部附属病院（熊谷内科）の「医員介補」となり女医として勤務した。医員介補とは大学病院で働く医員＝医師の補佐役であり、医員が大学での「医学士」で占められるのに対し、医員介補には医学専門学校を卒業した医師などが任じられていた。その後２人はともに1939（昭和14）年から医学部副手となり引き続き熊谷内科に勤務、在職中に学位論文を提出、学位を取得した。２人とも、当時の熊谷内科の主要テーマである結核にかかわる研究である。

1945（昭和20）年３月に学位を得た櫻岡幾代も、東京女子医専を卒業後東北帝大医学部附属病院で医員介補（小児科）となり、気仙沼での開業を経て1936（昭和11）年医学部附属病院に医員介補として復帰。その後1940（昭和15）年東北帝大副手となっている。学位論文提出時は大学病院を出て仙台逓信病院に勤務していたが、論文の中核部分は大学病院在職中に書かれた論文であろう。また1944（昭和19）年５月取得の小林テツは、東京女子医専卒業後東京市立深川病院で医員助手・医員をつとめたあと北海道帝大医学部副手を経て東北帝大医学部副手（医化学教室）となり、在職中に学位論文を提出した。東北大病院での医員介補勤務こそないものの、市立病院で医員を勤めており、その後帝大副手となっている点では共通している。

もうひとり、1945（昭和20）年11月に取得した守屋マサについても見ておこう。守屋もまた帝国女子医学薬学専門学校の卒業生で、医学部附属病院医員介補を経て医学部附属病院の副手（熊谷内科）となり、その後1943（昭和18）年に熊谷が所長をつとめる抗酸菌病研究所に副手と

表10　女性学位取得者 - 医学博士（1948年以前）

区分	氏名 授与日	題目	学位取得までの主な学歴・職歴等	調査委員	
医博	井出ひろ 1931.10.8	人間男性の正中並びに座骨神経の横断面に現れたる人種に関する種々の特徴に就て	1918 東京女子医学専門学校卒 1918 東京女子医学専門学校助手（-1921） 1921 ワシントン大学留学 1923 ワシントン州医師免許 1927 ウィスター研究所客員研究員	布施現之助 木村男也	開業医
	吉原リュウ 1933.3.6	「エンテロコツケン」の研究	1920 東京女子医学専門学校卒 1921 東京帝国大学で眼科研究 1924 米国南加州大学留学 1927 アリゾナ州医師開業免許 1928 ハワイ州医師開業免許 1928 ドイツ留学。ベルリン市立ウィルヒョウ病院附属細菌学研究所で研究 1931 フライブルク大学で学位取得 1931 東北帝国大学医学部専攻生	青木薫 近藤正二	
	三神秋子 1941.4.18	分極方法による胃粘液測定について	1932 帝国女子医学薬学専門学校卒 1932 東北帝国大学医学部附属医院医員介補（附属病院熊谷内科勤務） 1939 東北帝国大学副手（同上）	加藤豊治郎 内野仙治	
	大山文路 1941.4.18	胃液中の結核菌培養証明とその臨床的意義	1931 帝国女子医学薬学専門学校 1931 東北帝国大学医学部附属医院医員介補（附属病院熊谷内科勤務） 1939 東北帝国大学医学部副手（同上）	黒屋政彦 加藤豊治郎	
	小林テツ 1944.8.2	「ヒヨンドロヂン」の研究	1937 東京女子医学専門学校卒 1937 東京市立深川病院医員助手 1940 同病院医員 1940 北海道帝国大学医学部副手（医化学） 1942 東北帝国大学医学部副手（医化学）	正宗一 佐武安太郎	
	櫻岡幾代 1945.7.21	種々なる荒川氏反応を呈する乳婦の母乳血液及尿中のクロール含量に就て	1922 東京女子医学専門学校卒 1922 東北帝国大学医学部附属病院医員介補（小児科） 1940 東北帝国大学副手（附属病院小児科） 1943 仙台逓信病院医務嘱託（小児科）	佐藤彰 正宗一	
	守屋マサ 1945.11.10	連理草の血糖降下作用に就て	1938 帝国女子医学薬学専門学校卒 1938 東北帝国大学医学部附属病院医員介補（熊谷内科） 1939 東北帝国大学副手（同上） 1943 抗酸菌病研究所副手 1944 抗酸菌病研究所嘱託 （1946 抗酸菌病研究所助手）	大里俊吾・ 寺坂源雄	

出典：『学位録　大正10年９月から昭和37年３月まで（東北大学）』、庶務部入試課移管文書『学位』（東北大学史料館所蔵）

して移籍。抗研副手在任中の1945（昭和20）年１月に学位論文「連理草の血糖降下作用に就て」を提出して医学博士の学位を取得し、その翌年助手となった。学位論文となった研究は、熊谷岱蔵がわずかな時間差でノーベル賞を逃したとされるインシュリンに代わるものとして、熊谷研究室の方針として新しい植物性ホルモンの探求をはじめたことに伴うものであるという。守屋はこの学位取得の直後抗酸菌病研究所の助手となっている。ただし1947（昭和22）年結婚に伴い研究に一区切りをつけ退職したとのことである[(19)]。

このように、1940年代以降の医学博士については、大学病院などに勤務し、医員介補らとして経験を重ねる中で助手・副手に採用され学位論文をまとめる、というパターンが存在した。助手となったのは守屋のみだが副手も含めると学位取得者がすべてこのコースを歩んでいることにある。彼女たちはすでに1930年代から医学部や附属病院の各教室に入っているので、医学

部においては1930年代から徐々にこうした女性研究者が増え始めていた、ということができよう。もちろんこれは女性医師に限ったことではないが、医学部および大学院への進路が女性に対し基本的に閉ざされている中で、大学病院等への勤務は、女性が医学研究者としてキャリアを重ねていくうえでの極めて重要な経路であったと考えられる。

このように、特に1940年代以降、各研究所や工学部・医学部には、医薬系を中心とする理科系の専門学校を出た女性が集まり、その中から研究者としてのステップを踏み出す人々もいた。こうした事例をどう位置づけるかも、今後の課題となろう。

(5) 講師 - 吉田武子

戦前・戦中期の東北帝国大学では、女性の教授・助教授は存在しない。東北大学で初めての女性助教授は1949（昭和24）年の新制大学発足時に教育教養部家庭科担当の助教授として宮城師範学校から移籍した一条トクであり、教育教養部以外ということになると、前述した柿田八千代が1954（昭和29）年に金属材料研究所の助教授となったのが最初のようである[20]。

講師の職位を得た女性は、ひとりだけ存在する。1937（昭和12）年に理学部（化学科）の講師嘱託となった吉田武子である。先にも述べたように、吉田は東京女子高等師範学校理科を1914（大正３）年３月に卒業し1924（大正13）年４月に理学部化学科に黒田・丹下以来11年ぶりの女子学生として入学。1927（昭和２）年卒業後は２年間、東北帝大内に設けられていた理化学研究所石川総雄（東北帝大教授）研究室の研究員となり、その後1929（昭和４）年に京都帝大化学研究所に研究員として入所、堀場信吉教授の研究室に所属し研究業績を重ねた。

吉田が東北帝大理学部の講師を嘱託されたのは1937（昭和12）年11月。当時はまだ学生時代の指導教授である石川総雄が在任中であり、石川の推挙かもしれない。京大化学研究所の研究員はその後も1940（昭和15）年まで兼務したようだが、理学部講師就任と同時期に宮城県女子専門学校の教授にも任じられており、この時拠点も京都から仙台に移したのであろう。吉田はその後1942（昭和17）年に学位論文を提出して理学博士となる。学位論文の「アンモニアと二酸化炭素の反応動力学」は京都帝大時代から手掛けた研究をまとめたものである[21]。その翌年吉田は帝国女子理学専門学校教授に転出、ほどなく母校東京女子高等師範学校の教授となっている。

おわりに

以上、羅列的にではあるが、戦前・戦中期を中心とする形で、東北帝国大学における女子学生・女性研究者の状況について概観してきた。女子学生の受け入れが従来からも指摘されている、学生募集における「門戸開放」方針の一環として、いわば学生確保の一環として構想され継承された方針であることはいうまでもないが、出身地域や進学経路の分析、その時代的な変遷をより細かく追いかけることで、これを全国的動向の中に位置づけ、より広い歴史的文脈の中に東北帝大への女性への進学を位置づけることが可能となろう。

同時に、研究者のキャリアという観点から見た場合、学部学生―大学院といういわば正系の研究者養成コースと別に、特に1930年代後半から40年代にかけて、医学系や工学系といったいわば女性に対し学生としての大学入学の門戸が閉ざされているような分野においても、病院や研究所といった現業的な研究機関の戦力として女性が登用され始め、そのなかから女性研究者

が育ち始めていた、という状況も見ることができるように思う。戦前の女性科学者の状況については家政学など一部の分野や理化学研究所など一部の研究機関でおこなわれているものの、総合的な研究はまだこれからであり、本稿で指摘した事実も今後の今後他の大学や研究機関での動向とあわせて、社会史的・科学史的な位置づけをおこなっていく必要があろう。今後の課題としたい。

注

(1) 最も代表的な研究として、湯川次義『近代日本の女性と大学教育－教育機会開放をめぐる歴史』があげられよう（2003年不二出版）。そのほかにも、橋本紀子『男女共学制の史的研究』（1992年、大月書店）、影山昇「澤柳政太郎と女子高等教育：東北帝国大学への門戸開放」『成城文藝』170、2000年、谷脇由季子「東北帝国大学草創期における女性への門戸開放：学問研究の平等性とその保障体制としての共学制 」『成城文藝』197　2005年など。

(2) 本稿の内容は、かつて東北大学史料館企画展「東北帝国大学と女子学生」に際し執筆した拙稿「東北帝国大学と女子学生」（『成瀬記念館』2001　2001年日本女子大学成瀬記念館）および「企画展「東北帝国大学と女子学生」より」（『東北大学史料館だより』第３号　2001年東北大学史料館）と一部重複するが、広報誌としての性格上これらには簡単な記述しかできず、またその後の再調査によりデータ等の修正が必要な部分も生じているため、重複部分についてもあらためて執筆することとした。今後は本稿のデータによられたい。

(3)『大正二年度　教務書類　甲』（東北大学史料館所蔵）

(4) 後の回想記事ではあるが、丹下ウメは入学の前年に別件で上京した小川正孝理科大学長から志願の打診を承けており（朝日新聞昭和25年12月25日夕刊）、また東京女子高等師範学校では大正二年の初め頃に東北帝大を受験する候補を在職教員の中から選ぶ動きがおこり、最初に牧田が、次いで黒田が候補者として推薦されるに至ったという（黒田チカ「化学に親しむ　悦びと感謝」1966年）

(5)「女子高等教育に対する各家の意見　その二」『家庭週報』（日本女子大学校校友会誌）106号　1907年。湯川前掲書など参照。

(6)『東北大学百年史』通史編一（2007年）

(7) 大正２年５月、東京女子高等師範学校は東北帝国大学宛に黒田チカ・牧田らくらの入学の可否について東北帝大総長あてに照会している。この文書によれば女高師側は彼女たちを卒業後再び女高師教員として採用するとしており、また黒田の東北帝大入学に際し、東京女子高等師範学校は黒田助教授を休職扱いとしている。

(8) 1922年に理学部に入学した聴講生は、江角ヤス（東京女子高等師範学校卒業　のち長崎純心女子大学理事長）と金光栄（奈良女子高等師範学校卒業）の二人。いずれも数学科に入学した。

(9) 森本治枝『ある女性数学者の回想』（1995年九州大学出版会）59ページ

(10) スタドニチェンコの動向については『河北新報』大正９年２月26日、同３月23日、４月２日、４月９日、大正11年１月２日、４月３日、９月15日、11月４日など参照。なおウラジオストク政府とは、ロシア革命後極東に成立した独自の革命政権。

(11) 周一川『中国人女性の日本留学史研究』（2000年国書刊行会）、永田英明「戦前期東北大学における留学生受入の展開」『東北大学史料館紀要』創刊号　2006年）

(12) 伊藤彰浩「概説 - 戦前期官立高等教育機関における助手制度」（伊藤彰浩・岩田弘三・中野実『近代日本高等教育における助手制度の研究』1990年広島大学大学教育研究センター）

(13) 法文学部では独自に「助手副手規程」を定めているが、昭和四年の改正案によれば副手は「人物成績共に優秀なる事を要す」助手は「副手を一年以上務めたるものによることとし論文もしくは研究成績の審査

によりて銓衡し問題あるときは投票によりてこれを決す」と定めている。

(14)『東北帝国大学理科大学一覧』の職員表には丹下の名前は見えないが、理学部の同窓会会報である『自修会報』の卒業生名簿には大正10・11年の名簿に「工学部助手」と記されている。工学部には当時応用化学科があり、その主任教授は丹下の指導教官である眞島利行と交友の深い井上仁吉がつとめていた。

(15)『金属材料研究所　教授会議事録』自昭和17年至25年　東北大学史料館所蔵

(16) 以下、学位取得者の履歴については、主として東北大学史料館所蔵文書『学位』(学位の申請および審査・授与にかかる手続文書）に収載された履歴による。

(17) 伊藤彰浩前掲論文参照。

(18)『有賀美智子先生追悼文集』(2000年　有賀きょうだい会)

(19) 以上については、安部マサ「二人の恩師」(『東北大学抗酸菌病研究所創立50周年記念誌』1993年）による。

(20)『東北大学百年史』第十巻収載の教官任官表による。

(21) 吉田武子「アムモニアと二酸化炭素との反應（第一報)」(『物理化學の進歩』10-4, 1936年）など。